

見する歴史ウォークが静かにブームとなつています。

三田藩の人々は、明治維新後福澤諭吉の助言に従い、近代化を見据えて港町神戸へと活躍の場を広げました。日本の近代化の分岐点となつた明治維新を背景にした三田から神戸に繋がる革新の物語、全国的にも活躍した偉人を輩出し、いま触れても胸が高鳴るような口マンを感じます。

「賢者は歴史に学ぶ」ということわざがあるように身近な地域の歴史を知り、歴史を見つめ直すことにより、未来を拓くことができるのではないのでしょうか。

### 物理化学を深く研究した日本近代化学の祖、川本幸民

三田ゆかりの川本幸民をご存知でしょうか。

幸民は蘭書を翻訳し「欧米の先端技術を紹介することによって、日本が西洋の国々に追いつく手助けをしよう」という強い意志の表れが、日本で初めてビール醸造を成功させ、ドイツの化学書



を訳し、それまで「舎密学」と呼ばれていた分野に日本ではじめて「化学」という言葉をあてました。マツチや写真機なども日本人として初めて試作に成功させたのも、三田藩の開明的な蘭学者川本幸民なのです。このように意外な「発祥」物語がみえてきます。

川本幸民は幕末に三田藩医、川本周安の三男として三田に生まれ、藩校造土館に学び、後に緒方洪庵や青木周弼らとともに江戸の坪井信道塾に学びました。三田藩医で、蘭学者として名を馳せ、薩摩藩主島津斉彬の知遇を受け、幕府の蕃書調所教授を務めた人物です。

晩年は故郷の三田に戻り「英蘭塾」を開き地元の人材育成に貢献しました。激動の時代を生きた先人たちのゆかりの場所と足跡を訪ねる「幸民まつり」を毎年九月に開催し、四年目となります。二〇一〇年には「幸民生誕二百年」を迎えます。またこの夏には北康利さんが東京の出版社より「蘭学者川本幸民」の著書を出されると、全国から訪れる観光客は顕著に増加することでしょう。これを好機として、「川本幸民の町三田」を全国に発信していきたいと思っています。（副会長・高田義久）

## 陸に上がった河童

戦国時代は織田信長の台頭によって新しい国の形がイメージされた。その「天下布武」を下支えした織田水軍、即ち九鬼水軍、その功により志摩の鳥羽に城を持ち、大名格を与えられた。しかし、信長は天下統一を具体化できぬまま一命を失い、事後は豊臣、徳川へと流れて、ようやく徳川家康コンセプトの幕府統一天下が完成を見た。時に十七世紀の初めだった。



秀吉の心中に強力な水軍の価値は確かめられたに違いはない。しかし関が原の役後を掌握した家康の天下統一の主眼は揺るぎない幕藩体制の確立にあり、政策の基本は鎖

世にいう戦国三英傑、信長、秀吉、家康、その中心に描いた国家のコンセプトには大きな違いがあった。猛烈な勢いで天下布武に向った織田信長、しかし心ならずも完成を前にして非業の死を遂げた。その後を受けた豊臣秀吉は信長の志を承けてか、逞しい水軍力を保有する各大名たちの力量を試すが如く、二度にわたって朝鮮半島に攻め上った。二度とも大した成果無く引

国にあったから強力な水軍力を無用の長物と見て、危ない存在と評価したのではなかったか。それが九鬼藩の取り扱いに表れたようだ。全ての勢力を幕府コンセプトで管理可能にする上で、最も管理し難い厄介なもの、それは強い水軍力を保有する九鬼一族に他ならなかった。必要などきにはこれほど役に立つものはないけれど、そうでないときには、これほどアブナイものはない。家康の政策は、外国との交わりに重きを置かず、家訓に代わるべきものとして、鎖国政策を採用し、宣言していた。このこと、家康の本心は（当分の間）とか（当面）や（暫く）等の思いがあったのかどうか、明らかではない。しかし、この事、その後三百年に亘って代々の将軍は後生大事と守り通してしまった。そのために日本は欧州列強の植民地政策時代の流れに乗り遅れてしまったのだと筆者は考

える。いずれにしても徳川幕府は、水軍で鳴らした九鬼一族を海つぶちへ置いておくわけにもいかず、三代目の時、九鬼藩の三田移封を実行した。そこは正に六甲山脈の北の麓に広がる台地、日本海、丹後半島の海辺にも、生まれ故郷、紀州・伊勢・志摩の熊野灘も遠かった。とても、水軍どころの話じゃなかった。（エエイ畜生、畜生、根畜生！）の思い位はあったことだろう。

筆者が初めて三田九鬼一族の菩提寺心月院の山門に立った時、ふと振り返って南の方を眺めたら、その風景は穏やかに東西に流れる六甲山脈の姿であった。しかし、その風景こそは、正に筆者が生まれ育った伊勢大湊の浜辺から眺める伊勢の霊峰朝熊山の風景そのものであった。嘉隆から数えて三代目、突然陸に引つ張り上げられた河童状態の当主久隆の胸の裡を見る思いであった。

六甲霞みて偲ぶるる伊勢の朝熊の若き

折り伏し（筆者）（畜生、畜生、根畜生！）も、いつまでもそんな思いに捉われてもいられまい、我が一族の先祖たち、こんな思いは一度や二度のことじゃない。さあ、新しい生き方、見つけよう。三百年前、世は一天二君の南北朝時代、われらが先祖は藤原中将隆信、通称佐倉中将と呼ばれ、朝臣と呼ばれる高貴な都人であった。それが或る日、足利勢に攻められて敗れ、思い立って紀州は尾鷲、九木浦に移り住み、その高貴な地位も名もかなぐり捨てた。九木の木の字は修験道のことだ。そんならいつそ、神か仏かはたまた鬼かで、九鬼と称することにした。これが姓の興りである。

そこはまさしく海つぶち、紀州・熊野から東に向かって数百キロの熊野灘。南はとことん大海原、水平線までは目が届くけど、それから先は分からない。水平線の向こうは何も無いんだとなんて考えら

れない。あの向こうには何があるんだろう、どうなっているんだろう。知りたい、知りたい、何とか分かる方法は無いものか……。旧い価値をかなぐり捨てて、再起を期したこの一族の心、ソクラテスじゃないけれど、「無知の知」を会得して、新しい価値に生きる精神に辿り着いた。価値観の転換というやつだ。この未来志向の精神が、大海原を背にして生きる田舎暮らしを逆手にとつて、強い水軍力を育てることとなり、新しい国家像を目指す新型リ

ダー、織田信長とのコラボレーションにつながったのだ。この推移に想いを走らせるならば、今此処で逡巡してなどいられない。「この次は何だ、どんな時代がやって来るんだ。」  
「そうや、人や、人が時代を作るんや、男も女も、勉強せんきゃあ、いかにな！」この意気込みと流れの中で、秀才・川本幸民が生まれ育ち、ユニークなイケメン男・白洲次郎も出現したのだ。陸に上がった河童は干からびはしなかった。（文・理事…吉角 弘）



北康利著『蘭学者 川本幸民』PHP社より6月発刊  
北康利さんからPHP社白石編集長宛のメールが飛び込んできた。川本幸民に関し三田現地取材について、私に気軽に相談せよとのことである。それから待つこと二週間、白石さんから電話を頂き、四月三十日十五時からご案内することになった。事前に必要な写真は用意していたが、当日、午前中スケジュールが空いていたので、三田小学校の校長室にある三田城かまどあと跡と城下町三田古地図見学の予約を行ったついでに、時間内に全コースを見学できるか、見学コースの最終確認を行った。予定通り十五時に、白石さんにご到着。既に文章の校正は終り、写真や資料の収集を急いでいるとのことである。気になる出版予定は六月、その他、「男爵九鬼隆一」が九月に出版予定で、近々別の担当者が取材に来るので対応願いたいとのことである。熱いお茶で一息入れて、夏日となったカンカン照りの暑い中、歩いて見学に出かけた。足軽町の川本幸民生誕地をスタートに、藩校造土館跡、川本幸民顕彰碑、三田城跡、三田小学校、三田大池、英蘭塾跡、歴史資料収蔵館と巡り歩いたが、どこにも史跡らしい史跡はなく、文字だけの看板がかかっているだけ。何だか申し訳なくなつたが、屋敷町に微かに残る武家屋敷の雰囲気を感じながら歩いていただいた。何か資料をと立ち寄った歴史資料収蔵館では文化ボランティアのメンバーが翌日からの展示に向けて忙しく作業をしていたが、暫く手を止めて言葉を交わすことが出来た。又、十七時過ぎには高田副会長に役所へ来ていただき、川本幸民生誕地にあった家の写真など、貴重な資料を提供していただくことができた。別れ際の市役所裏口で竹内市長にご挨拶できたのも幸運であった。川本幸民生誕二百年に向けて、外的環境は着々と整っており、頑張らねばと思う。（文 会員…野上和雄）